研究

石井鶴山と藪孤山
——肥前佐賀藩儒と肥後熊本藩儒の交流——

中尾健一郎

はじめに

石井鶴山（一七四四～一七九〇）は、近世中期における佐賀藩の儒者である。名は有、字は仲車、通称は有助、鶴山は号で出身地である肥前多久邑（現在の佐賀県多久市）にある山に由来する。少年時代に黄蘗僧大潮元皓（一六七六～一七六八）に学んだ後、多久の東原庠舎の訓導を務め、京都に遊学して高葛陂（一七二四～一七七六）に師事した。江戸で佐賀藩第八代藩主・鍋島治茂（一七四五～一八〇五）の侍読に登用され、佐賀藩校弘道館が開設された際には、古賀精里（一七五〇～一八一七）のもとで助教の任にあたった。藩主治茂が参勤交代により江戸に赴く際には、常に附き従ったことが、精里の「佐嘉文学石井先生墓表」（『精里全書』巻二〇）に記されている。

さて鶴山は、藩校弘道館の創設時の教官の一人であり、幕臣大田南畝（一七四九～一八二三）や広島藩儒頼春水（一七四六～一八一六）、天台僧六如慈周（一七三四～一八〇一）らと交流を持つなど、往時はそれなりに名を知られた人物である。しかし、現在は研究者に顧みられることも殆どなく、出身地である佐賀でも知名度が高いとは言えない。

その理由は主に次の二点に求められる。一つは、鶴山が残した文集が出版されていないことである。彼の文集は『鶴山遺稿』三巻（多久市郷土資料館蔵）と『帰鞍漫稿』（同前、『鶴山遺稿』の稿本の一部）、『鶴山詩集』（国立国会図書館蔵）の三種しか現存しない。文集そのものが普及していないため、研究対象となりにくいのである。もう一つは、上記と関わるが、精里の「佐嘉文学石井先生墓表」、及び草場佩川（一七八七～一八六七）の「謄写鶴山石先生遺稿」（『鶴山遺稿』巻一）、同じく佩川の『山野一善』（佐賀県立図書館蔵）のほかに、鶴山という人物の生涯を一覧できる伝記がなく、しかも精里らの文章は、八六〇余篇の詩文を遺した鶴山の人生を遍く説き尽くしたものではない。[1] 言うなれば石井鶴山とは、文集も流布しておらず、伝記資料に乏しい、忘れられた文人であったといって過言ではないだろう。

しかるに藩校弘道館の教官を務めただけでなく、古賀精里、大田南畝をはじめとする著名な漢詩人と密接に交流し、また日本の各地を巡って夥しい漢詩を詠んだこの人物は、決して忘れさられてよいわけではない。筆者は現在、他の研究者と共同で鶴山の詩文の翻刻を行い、彼の伝記を執筆しているが、その過程において、鶴山が肥後熊本藩に赴いた際、当地の藩校時習館の第二代教授であった藪孤山（一七三五～一八〇二）と親密な交流を持ったことに気づいた。そこで両者の詩文を読み解くことによって、その交流の実相を明らかにしたい。なお鶴山の詩文の本文は、前出の『鶴山

遺稿』（細川章氏旧蔵書）に基づき、孤山の詩文は『孤山先生遺稿』[2]に拠った。

一　鶴山の熊本行き

鶴山と交流を持った文人の一人、藪孤山は朱子学者藪慎庵（一六八九～一七四四）の子で熊本藩儒。名は愨、字は子厚、通称は茂次郎、孤山は号である。肥後熊本藩第六代藩主・細川重賢（一七二一～一七八五）に仕え、藩校時習館初代教授・秋山玉山（一七〇二～一七六四）の後を継いで第二代教授となった。著作に『崇孟』（安永四年刊）があり、その詩文は『孤山先生遺稿』（文化一三年刊）に収められている。[3]

孤山の特筆すべき業績としては、熊本藩の藩主から士人に至るまでの漢詩集である『楽泮集』（安永七年刊）の編纂が挙げられる。寛政の三博士の一人である柴野栗山（一七三六～一八〇七）が『楽泮集』を称賛したという一事をもってしても、この壮挙がいかに驚嘆すべきことであったかがよくわかる。[4]

ところで、この孤山と鶴山は交流を持ったばかりでなく、後述するように、二〇首もの五絶を応酬している。そのなれ初めは、佐賀藩主鍋島治茂によって、鶴山が熊本行きを認められた時に求められるであろう。

天明元年（一七八一）に弘道館の助教となった鶴山は、職掌として他藩の藩校がどのように組織されていたかが気になったと見える。翌年、自ら主君治茂に願い出て、肥後熊本藩の時習館、薩摩藩の造士館の視察に赴いたのである。そのことは、『泰国院様御年譜地取』天明二年（一七八二）の項に次のように記録されている。[5]

二月廿二日、石井有助より申達候は、為学問稽古数年 上方並関東筋巡歴仕、師友を求候而講論仕候得共、却而近国は相残候故、九州地相巡リ度、就中肥後・薩摩両国は学校等相建居、篤学之人も数多有之由、然処、御当地ニも弘道館被相建、師範方被仰付置候付而ハ、一刻も罷越、諸国学校之制度、士民之風俗、政道之得失をも相察候ハヽ、御家中取立之益ニも可相成候条、日数四十日之御暇被差免被下度奉願候処、其通被仰出[6]

右に記述されている鶴山の要望の内容は次のようである。鶴山本人は、上方、関東などの遠国に師友を求めて遊学したが、近国は周遊していないので、九州の地を廻りたいと考えている。とりわけ肥後と薩摩の両国は藩校などを建て、篤学の士も多いからである。佐賀藩でも藩校弘道館が建てられ、師範も仰せつけられているのであるが、一刻も早く当地へ赴いて両国の学校制度、武士・庶民の風俗、政道の得失などを観察し報告すれば、佐賀藩家中の利益にもなるであろうから、四十日の休暇をいただきたい。

鶴山の要請は受け入れられ、この年の出立となっている。通説では、鶴山は治茂の命を受けて肥後・薩摩へ赴いたように考えられている。[7]しかし実際は、『泰国院様御年譜地取』に記録されているように、鶴山自らが進んで視察の旅を申し出たのである。

二　鶴山の孤山訪問

出発の時期は明らかでないが、鶴山が熊本を訪問したのは天明二年の初夏の頃であった。この時のことを孤山が次のように詠んでいるからであ

る。

栄府石文学初見枉顧、賦贈

栄府の石文学、初めて枉げて顧みられ、賦して贈る

十歳相聞一日看　十歳　相い聞きて　一日にして看る
杯尊聊此結交驩　杯尊　聊か此に交驩を結ぶ
誰忍怨怨分手去　誰か忍びん　怨怨として手を分かちて去るに
夏宵雖短月猶残　夏宵　短しと雖も月猶お残る

（藪孤山『孤山先生遺稿』巻七）

初めて対面する一〇年前から、孤山は鶴山のことを耳にしていた。それがいかなる事情によってであったかは不明だが、おそらく孤山が宝暦八年（一七五八）の京都遊学時に知り合った、肥前蓮池藩儒河野恕斎（一七四三～一七七九）を通してのことであったかと考えられる。[8] 鶴山と恕斎は安永六年（一七七七）に大坂にて詩の応酬をするなど懇意の仲であったから、旧知の恕斎を通して孤山が鶴山のことを聞いていたとしても不思議ではない。あるいは孤山が鶴山のことを知ったのは、蓮池藩士松枝貞辰（？～一七九二）、佐賀藩士横尾紫洋（一七三四～一七八四）を介してであった可能性もある。両名ともに『孤山先生遺稿』に唱和詩があり、また鶴山の知人でもあるからである。[9] 共通の知人を介して予備知識があったこともあり、鶴山が熊本に孤山を訪ねると、八歳も年が離れているにもかかわらず、二人はたちまち意気投合し、残月の浮かぶ夜明け前まで酒杯を交わしたのである。

この時、鶴山は古賀精里の書簡を携えてきたことが、孤山の次の詩からわかる。

石文学辱臨、古文学辱書。賦贈古文学、以代答簡

石文学辱臨し、古文学書を辱くす。賦して古文学に贈り、以て答簡に代う

忽迎佳客掃蒿萊　忽ち佳客を迎えて蒿萊を掃き
喜見彩雲朶朶開　彩雲の朶朶として開くを喜び見る
三珠樹上双仙鶴　三珠樹上の双仙鶴
何不遙飛天際来　何ぞ遙かに天際より飛び来らざる

（藪孤山『孤山先生遺稿』巻七）

孤山はにわかに鶴山の来訪を知り、庭の雑草を取りのぞいて出迎えた。鶴山が持参した古賀精里の書簡の、五色の雲を拡げたかのような素晴らしい墨蹟を目にして、孤山は大いに喜んだ。その一方で、三珠樹（『山海経』に見える珍木）上の仙鶴に類する精里は、いったい何故来られなかったのか。そのような問いかけの意を詠んで、孤山は精里への返信に代えたのである。精里がしたためた手紙の内容は明らかでないが、鶴山と同じく藩校の経営に関することであったと想像される。弘道館の教授を務めて日の浅い精里にとって、時習館において藩士の育成にあたっている孤山の助言は必要だったと考えられるからである。

三　鶴山の孤山再訪

薩摩藩校造士館へ赴いた鶴山は、その帰路に再び孤山の自邸を訪問し

た。鶴山の休暇期間は四十日であったので、次の詩は天明二年の旧暦五月の半ば頃に詠まれたことが確実視される。

佐嘉石文学南遊、帰路見過、得十五刪

佐嘉の石文学南遊し、帰路に過られ、十五刪を得たり

遠遊帰客叩柴関　遠遊の帰客　柴関を叩き
為説南中奇絶山　為に説く　南中奇絶の山
秀色欲浮千里外　秀色　千里の外に浮かばんと欲し
流泉如咽五絃間　流泉　五絃の間に咽ぶが如し
胡床款款邀明月　胡床　款款として明月を邀え
魯酒徐徐破旅顔　魯酒　徐徐に旅顔を破る
休怪縁君飛興切　怪しむを休めよ　君に縁りて興を飛ばすことの切なるを
多年夢寐在躋攀　多年　夢寐に躋攀に在り

（藪孤山『孤山先生遺稿』巻五）

孤山の自邸で催された宴席にて、鶴山は薩摩・大隅の秀逸な山水の景観を楽しげに語った。満月が照らすなか胡坐をかき、すっかり打ち解けて杯を交わしながら、孤山は鶴山の話に熱心に耳を傾けた。なぜなら詩の尾聯に詠まれているように、孤山は長年のこと薩摩・大隅の名山に登ることを夢見ていたからであった。孤山の詩から、土産話に興じる二人の様子が目に浮かぶようである。なお孤山には、「山水謡十首」（『孤山先生遺稿』巻五）及び「野遊二十八首」（同巻四）の連作詩があり、もともと風光明媚な自然の景観を愛好したことが看取される。まだ見ぬ薩摩の山水を夢想していた孤山は、鶴山という同好の士を得て、そのイメージをふくらませたはずである。

さて、鶴山が南九州で詠んだと考えられる作は、「和藪孤山斎居雑詠二十絶」（後掲）のほかには見られない。草場佩川の「謄写鶴山石先生遺稿叙」に述べられるように、鶴山が伊予・讃岐・薩摩・大隅で作った詩篇は全部散佚してしまったからである。したがって鶴山が孤山と肥後熊本藩で応酬した詩篇のみが、南九州で作られた現存作品といえる。鶴山の連作詩だけでは、孤山との交流の実相を知ることはできないのだが、本節に取りあげた『孤山先生遺稿』中の、孤山が鶴山に贈った詩を読むことによって、二人の藩儒が親しく交流したことが明らかになるのである。

ところで、前節に掲げた孤山の「栄府石文学初見枉顧、賦贈」の転句に、「誰か忍びん　忽忽として手を分かちて去るに」とあるのを見ると、鶴山は往路においては熊本に短期間滞在し、ただちに鹿児島へと道を急いだように読める。そうであれば、復路にて再び熊本へ立ち寄った鶴山は、当初の時習館と造士館の視察という目的を果たしたこともあり、帰国までに若干の余裕があったのではないか。そうしたことを勘案すると、次節に取りあげる鶴山の唱和詩は、帰国以前に孤山邸にて作られたと考えられる。

四　孤山「斎居雑詠二十首」への鶴山の唱和

鶴山が二度の熊本訪問に際して詠んだ、現存する唯一の作品は、前述のように藪孤山の「斎居雑詠二十首」に唱和した連作詩である。因みに孤山の詩には次のような短い序が附されている。

余、斎居に病を養い、凡百皆な廃す。風雅一事のみ、忘懐する能わず、耳目の触るる所あれば、輒ち吟詠を為す。唯だ適しみて是に取り、敢えて宮商を論ず。乃ち小絶二十首を得て、書して以て二三の同好に示し、其の和して之れを広めんことを欲するなり。[10]

（藪孤山「斎居雑詠二十首」、『孤山先生遺稿』巻六）

閑居に病を得ていた孤山は、詩文を綴る風雅な営みを忘れることができず、自らが目に触れ耳で聞いたものを楽しみつつ、二〇首の五言絶句に詠んだ。その上で同好の士に唱和を求めたのである。

今田哲夫氏は、この二〇首の連作詩が作られたのは、安永九年（一七八〇）、孤山四十九歳の時であり、場所は緑川（熊本市南部を流れる一級河川）にあったらしい孤山の別荘だと推測している。[11] しかし、鶴山がこれに唱和していることから見て、制作時期は天明二年（一七八二）からそれほど遡らないはずである。詠詩の場所についても今田氏の説に首肯することはできない。なぜなら「近市」と題する詩が含まれているからである。また、遠方の佐賀から藩校時習館視察のために当地を訪れた石井鶴山が唱和していることを併せて考えれば、二〇首の詩が作られたのは、熊本城を遠く隔たった、自然の豊かな緑川流域ではなく、熊本にある孤山の邸宅であったと考えるのが自然である。

「近市」と題する詩に、「長房居市井、猶作玉壺遊」（長房 市井に居り、猶お玉壺の遊を作す）とあるのは、「壺中天」の概念を用いており、自邸の庭園を後漢・費長房が壺の中に見いだした別天地に見立てたのに通底する見方である。したがって、孤山も自身の所有する庭園を市井の中の別天地とした詩を詠んだと見なすことができる。

熊本に孤山を再訪し、最初の訪問よりさらにうち解けた仲となったその後、鶴山が孤山の求めに次韻詩を作って快く応じたであろうことは想像に難くない。あるいは鶴山は、現在は散佚している薩摩で作った紀行詩を孤山に披露し、それを承けて孤山が唱和を求めた可能性もある。その経緯はともかく、現実に『鶴山遺稿』には孤山の五絶に次韻した「和藪孤山斎居雑詠二十絶」が収録されている。

鶴山の唱和詩は、「梅」と「古鏡」の二首を欠き、一八首と不完全なものであるが、孤山の意を充分に汲みとることができていることが看取される。両者の詩の中から、第一首の「遠山」、第二首の「近市」、及び最終首の「剣」を挙げよう。

遠山

靄靄遠山色　靄靄たり　遠山の色
自当楼一面　自ら当たる　楼の一面
好朋来有時　好き朋　来るに時有り
山色朝暮見　山色　朝暮に見る

（藪孤山「斎居雑詠二十首」、『孤山先生遺稿』巻六）

右の詩は、孤山の「朝起望蘇山」（『孤山先生遺稿』巻三）および鶴山の唱和詩（後出）と併せて考えれば、孤山の自邸から見える阿蘇山の光景を詠むものである。良き友人が来訪したときには、朝となく夕となく、その山容を共に賞翫することができるという。

これに対する鶴山の唱和詩は次のようである。

遠山

海西小芙蓉　海西の小芙蓉
秀色無背面　秀色　背面無し
両肥隔一水　両肥　一水に隔てられ
山見人不見　山見ゆるとも　人見えず

（石井鶴山「和藪孤山斎居雑詠二十絶」、『鶴山遺稿』巻二）

九州の小さな芙蓉峰（富士山）とも称することのできる阿蘇の山。その美しい風景は陰になるところがなく、どこから眺めても素晴らしいものである。有明海に隔てられた肥前と肥後、そのいずれからも阿蘇山を見ることはできるが、鶴山と孤山がお互いの姿を仰ぎ見ることはできないと詠む。

佐賀から阿蘇山が見えるとは、考えにくいことである。しかし、近世の小城藩と佐賀藩で作られた漢詩文には、阿蘇の景観についてふれたものがあり、当地から阿蘇を望むことは可能であったようである。[12] 続けて「近市」を挙げよう。

近市

長房居市井　長房　市井に居り
猶作玉壺遊　猶お玉壺の遊を作す
未如方寸裡　未だ如かず　方寸の裡
喧寂両悠悠　喧寂　両に悠悠たるに

（藪孤山「斎居雑詠二十首」、『孤山先生遺稿』巻六）

この詩は、「壺中天」の故事を踏まえる。『後漢書』方術伝によれば、費長房が市場で薬を売っていた老人（壺公）と共に壺の中に入ると、そこは仙界であったという。この話を転用して、唐の白居易は洛陽履道里にあった自邸の庭園を壺中天と見なし、俗世間から離れた別天地として詩文に綴った。孤山はさらにこれを援用して、市場に近い場所に邸宅を構えているが、心の中が平安であれば巷間の喧噪も静寂も気にならず、仙界に行かずとも悠然と過ごすことができる、と詠んだのである。

一方の鶴山は、この詩の内容を承けて次のように詠んでいる。

近市

不易爽塏居　爽塏の居に易えざるも
豈為近利遊　豈に近利の遊を為さん
不知物貴賤　物の貴賤を知らず
市上壺天悠　市上も壺天より悠なり

（石井鶴山「和藪孤山斎居雑詠二十絶」、『鶴山遺稿』巻二）

この詩の起句に見える「爽塏居」は、乾燥した高所にある居宅のこと。『春秋左氏伝』昭公三年に、斉の景公が宰相である晏嬰（晏子）に、「子の宅は市に近く、湫隘囂塵（土地が卑湿で狭く、騒がしくて塵埃が多いこと）にして、以て居るべからず。諸れを爽塏に更えんことを請う」と、住居の移転・改築を呼びかけた故事を踏まえる。承句の「近利」とは利益を追求することであり、孤山が晏子と異なり、日常の利益のために市場の近くに住んでいるのではないことをいう。転句には『左伝』の故事を逆用して、晏子は物品の価格をよく知っていたが、孤山はそうではないと見なす。

そして結句には前句を承けて、孤山は金銭をはじめとする物質的なものには拘泥しないので、邸宅こそ市場の近くに在るものの、仙界に居るより安穏に過ごしていると詠み収めている。

「遠山」と「近市」の唱和詩のうち、特に後者の詩については、鶴山が孤山の意を迎えて、市場の近くに住んでいても、孤山が平静な心持ちでゆったりと過ごしているので、その邸宅は「壺中天」にも優ると詠んでいることが看取される。

次に挙げるのは、二〇首の連作の最後の詩である。

剣　伊正良所造

剣　伊正良の造る所なり

此剣出時工　此の剣　時工より出づ
干莫可同伍　干莫（干将・莫邪）同に伍すべし
神物生無時　神物　生ずるに時無し
何論今与古　何ぞ今と古とを論ぜん

（藪孤山「斎居雑詠二十首」、『孤山先生遺稿』巻六）

詩の内容は次のようである。孤山が所有している一振りの刀。これは当時の刀工の手に成り、中国春秋時代の干将と莫邪の名剣にも比肩できる。神霊の宿る宝物は出現する時代を選ばない。したがって、今のものが良いのか、それとも昔のものが良いのかを議論する必要はないのである。

この詩の題注に見える「伊正良」とは、刀匠・伊地知正良を指す。孤山は彼に「贈剣工伊正良」（『孤山先生遺稿』巻二）と題する七言古詩を贈っており、知人であったことがわかる。彼が薩摩の人であったことは、孤山の古詩だけでなく、鶴山が唱和した「剣」詩の内容からも裏付けられる。「正良」とは四代にわたる銘であり、孤山の時代には第三代正良（後に名を改めて正幸）が活躍していた。[13] 孤山は二〇首にも及ぶ連作詩を、自慢の名刀をもって締め括ったといえよう。

これに対して鶴山は、次の詩をもって応じた。

剣

薩国出良冶　薩国　良冶を出だす
工与昆吾伍　工みなること昆吾に伍す
精霊千載外　精霊　千載の外
可知今為古　今の古たるを知るべし

（石井鶴山「和藪孤山斎居雑詠二十絶」、『鶴山遺稿』巻二）

薩摩国は良い刀鍛冶を生んだ。その技によって造られた刀は、昆吾国（中国周代にあったとされる国）の名剣に匹敵する。刀剣に宿る精霊は千年の時を超えて存在し、それゆえに今の名刀は昔の名剣と同じである。鶴山は孤山の自慢の名刀を、春秋時代をさらに遡る古代の昆吾国で造られた名剣と同じであると称賛したのである。

引用は控えるが、孤山の連作詩の「馬」には、「知覧大夫の贈る所なり」（原漢文）との題注があり、薩摩の武士から贈られた馬が詠まれている。また孤山はこのほかに、「椰子杯」「越丘硯」などの珍奇なものを詠んでいる。鶴山はこれらについて唱和するにあたり、孤山に示されて現物を目にしたであろう。鶴山が詠んだ次韻詩は孤山の原作に見劣りしないため、孤山が詩の序文に述べた「同好」としての役割は充分に果たすことができたと見

られる。

五　鶴山と孤山の交流とその古文辞学に対する態度

二度にわたって孤山のもとを訪れた鶴山は、大潮元皓と高葛陂に師事し、「文は秦漢、詩は盛唐」を主張した荻生徂徠の古文辞学の流れに連なる詩人であり、一方の孤山は朱子学者として知られている。彼らは熊本の地で詩歌を応酬したのであるが、学派を異にする両者の、詩に対する考え方に齟齬はなかったのであろうか、との疑問が生じる。もちろん鶴山は朱子学者と交流しなかったわけではない。鶴山の交遊圏には、古賀精里や頼春水もいる。ただ、鶴山との詩の応酬という点から見ると、孤山とはやや様相を異にするようである。そこで本節では、古文辞学派が重要視した唐詩に対する両者の態度について考え、鶴山と孤山の詩歌の応酬が、なぜ成立し得たかについて検討したい。

前述のように、鶴山は佐賀にて大潮元皓について学んだ。大潮は黄檗僧で、肥前松浦の人。壮年期に江戸にて荻生徂徠、服部南郭ら護園の人々と交流した。[14] 明和五年（一七六八）以前の作と見られる鶴山の「重遊長淵禅寺、卒賦徘律一篇、奉呈甘露老尊者（重ねて長淵禅寺に遊び、卒に徘律一篇を賦し、甘露老尊者に呈し奉る）」（『鶴山遺稿』巻二）には、「歌詩唐調合、辞賦漢風存（歌詩は唐調に合し、辞賦に漢風存す）」と詠まれており、また、「得承甘露沢、深感恵業恩（甘露の沢を承くるを得て、深く恵業の恩に感ず）」と師恩に対する感謝が述べられ、さらに「自喜陪衣盍、斯文子細論（自ら喜ぶ　衣盍に陪い、斯文子細に論ずるを）」と結ばれている。この詩から、祖父と孫ほども年の離れた大潮と鶴山が、文学について仲睦まじく語り合っている情景が浮かびあがる。

言うまでもないことだが、該詩の最終句は杜甫の「春日憶李白」詩に、「何時一尊酒、重与細論文（何れの時にか一尊の酒もて、重ねて与に細かに文を論ぜん）」を踏まえる。鶴山は大潮と詩文について語り合う楽しみを、杜甫が李白と語らいあう楽しみに擬えたのである。以上のことから、鶴山は大潮より「文は秦漢、詩は盛唐」をテーゼとする古文辞学を授けられたことがわかる。

鶴山が京都で師事した高葛陂も古文辞学に連なる人物である。鶴山の「祭葛陂先生文」（『鶴山遺稿』巻一）にも見えるように、葛陂は江戸にて太宰春台（一六八〇～一七四七）、服部南郭（一六八三～一七五九）、板倉璜渓（一七〇九～一七四七）、石島筑波（一七〇八～一七五八）と親密な交遊関係を持った。[15] 春台と南郭および璜渓は、言わずと知れた荻生徂徠門下の弟子であり、筑波は南郭の門人である。高葛陂が彼らの影響下にあったことは疑いを容れない。事実、鶴山の祭文に、「其文先秦、其詩唐、最得孟襄陽所蘊。（其の文は先秦、其の詩は唐、最も孟襄陽〈孟浩然〉の蘊む所を得たり）」と述べられるように、葛陂は古文辞派の学問を行っていた。

大潮と葛陂の薫陶を受けた鶴山の古文辞学を尊重する態度は、終生変わることはなかったと見える。天明八年（一七八八）、鶴山は薩摩藩儒である友人赤崎海門（一七三九～一八〇二、朱子学者で孤山の門人）を江戸の薩摩藩邸に訪問し、その席上で贈った詩に、「寧くんぞ詩律の唐季を為るに甘んぜん、更に駭かす　文章の漢初に泝るを。（中略）嗤うなかれ　性僻にして吟も愈いよ僻なるを、是れ知音に非ざれば肯えて書せず」[16] と詠んでいる。古文辞派が退潮しつつあった天明のこの時期、鶴山が理想とするのは相変わらず秦漢の文章、盛唐の詩であり、晩唐風の繊細な詩はいさぎよし

とするところではなかった。その一方、このような創作態度が時代錯誤に見えるであろうことも、鶴山は強く自覚していた。それゆえに性格以上に吟詠が「僻」であるのを笑ってくれるな、知音であるあなたの前だからこそ、敢えてこのように書くのだ、と海門に弁明したのである。

一方の孤山は朱子学者である。その父慎庵は徂徠と交流を持ちながら、その説を肯んぜず朱子学を信奉しており、孤山はこれを家学として継承した。ところが、鶴山と孤山の詩集を読み合わせると、いずれもが擬唐詩を詠んでおり、[17] 詠物の作も多い。[18] 一見すると、詩の詠作について両者は気風を通じているようにも見える。

だが、詩の実作についてはともかく、孤山の意識において、自身は荻生徂徠の古文辞派と同流でなかったことは、次の文章から看取される。

凡そ衆鳥の音、之れを能くせざるなし、之れを名づけて百舌の鳥と曰う。然して斯の鳥、能く衆鳥の音を巧みにして、而れども自ら其の音を巧みにする能わざるなり。（中略）凡そ古人の態度音声、之れに像らざるなし、之れを名づけて俳優の人と曰う。然るに斯の人や、能く古人の態度音声を巧みにして、而れども自ら其の態度音声を巧みにする能わざるなり。是の故に百舌は、鳥の尤も賤しき者なり。俳優は、人の尤も賤しき者なり。嗚呼、豈に唯だ鳥に百舌有りて、人に俳優有るのみならんや。世に所謂古文辞なるは、其れ亦た焉れに似る所有るか。其れ亦た焉れに似る所無きか。[19]

（藪孤山「雑説」、『孤山先生遺稿』巻一五、『凡鳥館集』三）

右の文は、孤山が青年時代に江戸や京坂に遊学していた時期の詩文を集めた『凡鳥館集』に収められている。他の鳥の鳴き真似の上手な百舌と、他人の身振りや声音を真似ることに秀でた俳優を、ともに賤しいものと断じて、古文辞なるものもこれらと同類であると、孤山は厳しく指弾している。

このように孤山は、秦漢の文および漢魏・盛唐の詩を模倣する古文辞派を批判したが、自身は徂徠らが模範とする盛唐の詩を愛好していた。例を挙げれば、孤山は杜甫に追和した「追和杜子美陪鄭広文遊何将軍山林、仍次其韻八首（杜子美の鄭広文に陪して何将軍の山林に遊ぶに追和し、仍りて其の韻に次する八首）」（『孤山先生遺稿』巻四）、および「擬送賀知章致仕賜湖帰隠（賀知章の致仕して湖を賜り帰隠するを送るに擬す）」（同巻三）をはじめとする擬唐詩二〇首を作っている。古文辞派を批判した孤山は、何故にこのように唐詩を愛好したのであろうか。その理由を考えるに際しては、孤山の友人であった亀井南冥（一七四三～一八一四）の旅行記である『南遊紀行』[20] が参考になる。

同書によれば、安永四年（一七七五）十月六日、南冥は孤山のことを、「士厚氏は意を盛唐の諸家に刻し、融してこれを和す。故に精密渾厚、往々にして人を驚かすものあり。而して気格変じて中晩に之くは、勢いの必ず至るなり」[21] と評した。孤山は盛唐諸家の詩を苦心して学び、中唐・晩唐の詩にも学んでいることを説いたのだ。これに対して孤山は、「詩は諸れを風流才子に視ぶれば、与に藻（文藻）を闘わせ難し。而れども道学者流に於いては則ち翹楚なるのみ。且つ詩に李唐あり。幸いにして明の中晩に之かざるは、恤えざる所なり」[22] と応じ、自らは風流才子には及ばないが朱子学者の中では抜きんでていると自認し、唐詩を修めて明詩については気にかけないと述べている。

南冥は孤山の言葉と、それを「徳言」だと称賛する周囲の声を聞いて、さらに「孤山は朱子学を篤く信じながらその短所を除き、努めて徂徠の学問を排斥しながらその長所を襲っているのではないか」と評したところ、孤山は「その言葉について、狂夫は何も言いますまい」と笑って返した。そこで南冥は、自身の批評は当たっているとわかったと記述している。[23]

「狂夫」とは、杜甫の「狂夫」詩に「自笑狂夫老更狂（自ら笑う 狂夫の老いて更に狂なるを）」と詠むのを承けた表現である。前にふれた「贈剣工伊正良」にも「作歌相慰者誰子、阿蘇山下一狂夫（歌を作り相い慰むる者は誰子ぞ、阿蘇山下の一狂夫なり）」とあり、孤山の自称としても用いられる。杜甫の語を借りて応じているのを見ると、南冥の批評は孤山にとって当たらずとも遠からずといったところであっただろう。また同時に孤山は自身に擬えるほど、杜甫に傾倒していたと見ることもできる。

このやりとりの内容を具体的に言えば、朱子学者である孤山は、徂徠ら古文辞派が唐詩や明詩を模擬したことを批判したが、唐詩そのものについては古文辞派と同じく重要視し、自らの創作の模範としたということである。[24] 南冥はおそらく孤山の「擬初唐体」（『孤山先生遺稿』巻一三）、「擬送賀知章致仕賜湖帰隠」（既出）をはじめとする擬盛唐詩・擬中唐詩を知っており、それが『南遊紀行』中の批評につながったのであろう。

前述のように、孤山は杜甫に追和する連作詩を作っており、盛唐・中唐の詩人の中で、特に杜甫を好んだと見える。その理由を考えれば、杜甫は宋代の文人や学者たちが高く評価した詩人であるから、朱子学を信奉した孤山にとって、その詩は愛好し、尊重すべきものであったからに違いない。[25]

話を鶴山にもどして彼と孤山との共通点を見れば、両者は前節にふれた山水の愛好のほかに唐詩を愛好し、かつ尊重した。一方、異なる点をも挙げれば、鶴山は「擬李孟璿題童居士雲深処作（李孟璿の童居士の雲深き処に題するの作に擬す）」（『鶴山先生遺稿』巻二）[26]と題する擬明詩を作るなど、徂徠と同じく明詩をなおざりにしなかったが、孤山は擬明詩は作らなかった。したがって、鶴山と孤山が心おきなく交歓した背景には、徂徠学と朱子学という学問的バックボーンを異にしながら、風光明媚な山水と唐詩、就中、盛唐詩を愛好するという共通する嗜好があったと言えよう。

おわりに

以上、鶴山と孤山の交流について考察した。安永四年（一七七五）に鍋島治茂の侍講として抜擢された鶴山と、細川重賢のもとで時習館第二代教授として後学を指導した孤山は、天明二年（一七八二）のわずかな期間に交流を持った。鶴山の熊本訪問の名目は藩校運営の視察であったが、鶴山は公務のほかに孤山と詩歌を応酬し、薩摩の山水について語り合い、果ては孤山邸の庭園と文物を愛でて二十首もの次韻詩を遺した。かたや古文辞派の詩人であり、かたや朱子学者であることなど、両者の学風には違いこそあれ、唐詩を尊重するという態度には共通するものがあったゆえに、鶴山と孤山は、藩校の運営、名山名水と唐詩の愛好を共通項として有意義な交流を行ったといえる。

ここで、この鶴山と孤山の両者は、突然邂逅したわけではないことに注意したい。孤山は肥前蓮池藩儒の河野恕斎と知友であった。また佐賀藩や蓮池藩からは、熊本へ遊学した人物が複数いたことが、鶴山や孤山の文集から窺われる。[27] 言うなれば鶴山と孤山の出会いは、宝暦年間から寛政年間にかけて肥前と肥後の間で行われた文人の交流における一つの重要なト

ピックであった。これが後に古賀穀堂（一七七七～一八三六）を盟主とし、肥前と肥後の出身者を構成員とする、江戸の海鷗文社における両国の藩士の交流へと繋がるものであったことは、充分に考えられることである。[28]

鶴山が熊本藩校時習館と薩摩藩校造士館に赴いて見聞したことは、藩校弘道館の運営において必ず活かされたことであろう。ただ彼が藩校を視察した時の逸事や、視察の結果などについて、確実なことがわかる史料はまだ見いだすことできない。これらのことについては、今後の課題としたい。

註

（1）鶴山の伝記については、精里と佩川の文章をまとめたものが、中島吉郎『佐賀先哲叢話』（木下泰山堂、一九〇二年）に収められている。また断片的ながら細川章「多久漢詩文学の源流をさぐる」（同氏『佐嘉藩多久領 古文書に見る地域の人々』所収、文献出版、二〇〇〇年。初出は一九八七年、『佐賀の文学』）に言及がある。その他、鶴山が交流した著名な人物の氏名等については、『多久市史』第二巻近世編（多久市、二〇〇二年）、第七章第五節「儒学者の交流と展開」にほぼ網羅されている。ただいずれも郷土史研究上の著作にとどまり、鶴山を世に知らしめるには至っていない。

（2）本稿では、富士川英郎編『詩集日本漢詩』第一一巻（汲古書院、一九八七年）所収、文化十三年刊本の影印版を底本に用いた。

（3）『崇孟』は『日本思想大系37 徂徠学派』（岩波書店、一九七二年）に、『孤山先生遺稿』は『詩集日本漢詩』第一一巻（既出）にそれぞれ収められている。藪孤山についての研究には、今田哲夫氏の評伝『宝暦の詩人 藪孤山―詩とその心』（白鳳社、一九九一年）、頼惟勤「藪孤山雑説」（『漢文教室』第五六号、一九六一年）、同「藪孤山と亀井昭陽父子」（『日本思想大系37 徂徠学派』、既出）などがある。ただいずれの研究も鶴山についての言及はない。

（4）柴野栗山「采芹采茆集序」（古城貞吉編『肥後文献叢書』第五巻、隆文館、一九一〇年）に、「既十餘年、見肥人文詩、楽泮集者於京師市、自諸公子太夫以至于倉庫刀筆吏、斐然成章、其音渢渢雄偉、皆規模子羽文集（既に十餘年、肥人の文詩を見るに、『楽泮集』なるもの京師に於いて市（あきな）われ、諸公子太夫より以て倉庫刀筆の吏に至るまで、斐然として章を成し、其の音渢渢として雄偉、皆な子羽〈秋山玉山〉の文集を規模とす）」と述べられている。

（5）「泰国院様御年譜地取Ⅲ」（『佐賀県近世史料』第一編第七巻、佐賀県立図書館、一九九九年）は「天明二年」の部分を欠いているが、「天明元年」の項に附す弘道館関係の部分については、天明元年以降の記事が併記されている。

（6）「泰国院様御年譜地取Ⅲ」（同前）、九一～九二頁。

（7）管見の及ぶ範囲では、藤野保編『続佐賀藩の総合研究―藩政改革と明治維新―』（吉川弘文館、一九八七年）第三章「体制的危機の進行と対策」、第三節「藩政改革と弘道館の設立」（井上義巳執筆）に立てられている「1 石井鶴山の熊本遊学」の一小節が、鶴山の熊本行きを論じる早いものに属する。井上氏は「ここで注目すべきことは、古賀精里に命じるとともに、多久出身の侍講石井鶴山を熊本に遊学させて、細川重賢による熊本藩のいわゆる宝暦の藩政改革を実地に見分させて、藩校時習館の設立と藩政改革との関連性を十分に学ばせたことである」（同書五七〇頁）と記し、鍋島治茂が命じて鶴山を熊本に遊学させたように見なしている。

（8）孤山と恕斎の交流については、注3所掲、頼惟勤「藪孤山雑説」（一〇～一一頁）、今田哲夫『宝暦の詩人 藪孤山―詩とその心』（一〇九～一一〇頁）にそれぞれ簡単に紹介されている。なお孤山は恕斎の亡き後、「河野君伯潜墓碣」（『孤山先生遺稿』巻一二）を著してその死を悼んでいる。このことからも両者が親密な関係にあったことが窺われる。

（9）孤山が作った詩に、「蓮池大夫松君来訪賦呈」（『孤山先生遺稿』巻一）、「栄城呈黄道符、座有瓶花」（同巻五）がある。注3所掲、頼惟勤「藪孤山と亀井昭陽父子」によれば、孤山と交遊した松枝大夫は肥前蓮池藩大坂蔵屋敷詰の家老で名は善右衛門、河野恕斎の上役とされる（五五七頁）。なお、松枝貞辰については、旧肥前史談会編、小宮博康復刻編集『佐賀県歴史人名事典』（洋学堂書店、一九九三年）、一六〇～一六一頁に簡単な紹介がある。横尾紫洋（黄道符）については、同書一三頁を参照。

（10）原文は次のとおり。「余、斎居養病、凡百皆廃。風雅一事、不能忘懐、耳目所触、輒為吟詠。唯適是取、敢論宮商。乃得小絶二十首、書以示二三同好、欲其和而広

之也」

(11) 注3所掲『宝暦の詩人 藪孤山―詩とその心』、一二七頁を参照。おそらく今田氏は、『孤山先生遺稿』巻六において、「斎居雑詠二十首」の直後に「江楼」と題する五絶が配され、これに「欄干臨緑水、可以漱餘酲」(欄干 緑水に臨み、以て餘酲を漱ぐべし)と詠まれているのを参考にしたと見られる。

(12) 肥前小城藩主・鍋島直能編『八重一重』(佐賀大学附属図書館小城鍋島文庫蔵)の「桜岡二十景」に七絶「阿蘇晴煙」があり、また肥前佐賀藩主・鍋島綱茂著『観頤荘記』(公益財団法人鍋島報效会蔵)に「楼中之十一景題壁・阿蘇朝暉」の条がある。江戸時代の当時、小城藩と佐賀藩からは阿蘇山もしくはその噴煙が見えたようである。なお、『観頤荘記』については中尾友香梨編著『佐賀藩第三代藩主 鍋島綱茂の文芸―『観頤荘記』を読む―』(佐賀大学地域学歴史文化研究センター、二〇一六年)に全文が翻刻されている。

(13) 藤代義雄著作兼発行『日本刀工辞典 新刀篇』(藤代商店、一九三七年)、三一三〜三一五頁を参考。

(14) 大潮元皓については、大槻幹郎ほか編著『黄檗文化人名辞典』(思文閣出版、一九八八年)に立項され、その生涯の事跡について詳述されている。

(15) 「祭葛陂先生文」(『鶴山遺稿』巻一)の該当する箇所の原文は次のとおり。「東都最善徳夫、子遷、美仲、仲緑数子」

(16) 石井鶴山「奉訪赤文学席上分韻(赤文学を訪い奉り、席上に韻を分かつ)」(大田南畝『遊娯詩草』天明八年写本所載、国立国会図書館蔵)より引用。原文は次のとおり。「寧甘詩律為唐季、更駭文章泝漢初。(中略)莫嗤性僻吟愈僻、非是知音不肯書」。なお同書は、国立国会図書館デジタルコレクションにて閲覧できる。

(17) 鶴山の擬唐詩には、「擬春日早朝」(『鶴山遺稿』巻二)、「擬王維積雨輞川荘作」(同上)がある。孤山の擬唐詩については後述する。

(18) 明和年間から安永年間にかけて、上方では詠物詩が大流行しており、孤山と鶴山もその影響を受けていた可能性が考えられる。宮崎修多「大田南畝における雅と俗」(中野三敏編『日本の近世 第一二巻 文学と美術の成熟』、中央公論社、一九九三年)、二一八〜二二〇頁を参考。

(19) 原文は次のとおり。「凡衆鳥之音、莫不能之、名之曰百舌之鳥。然斯鳥能巧衆鳥之音、而不能自巧其音也。(中略)凡古人之態度音声、莫不像之、名之曰俳優之人。然斯人也、能巧古人之態度音声、而不能自巧其態度音声也。是故百舌、鳥之尤賤者也。俳優、人之尤賤者也。嗚呼、豈唯鳥有百舌、人有俳優而已哉。世之所謂古文辞者、其亦有所似焉耶。其亦無所似焉耶」

(20) 慶應義塾大学図書館所蔵写本。なお同書は、慶應義塾大学附属図書ホームページ、「グーグル図書館プロジェクト」に写真版が公開されている。本稿において『南遊紀行』の本文はこれより引用した。なお『南遊紀行』は『亀井南冥・昭陽全集』第一巻(葦書房、一九七八年)に翻刻されているが一部文字の異同、脱落が見られる。南冥訪熊時の孤山と南冥のやり取りについては、注3所掲、「藪孤山と亀井昭陽父子」に紹介されているため、これを参考した。

(21) 原文は次のとおり。「士厚氏刻意盛唐諸家、融而和之。故精密渾厚、往々有驚人者。而気格変之中晩、勢之必至也」

(22) 原文は次のとおり。「詩視諸風流才子、難与闘藻。而於道学者流、則翹楚耳。且詩有李唐、幸不之明中晩所弗恤也」

(23) 該当する箇所の原文は次のとおり。「客咸称徳言。余曰、『徳則徳矣。而未尽言。篤信宋儒而鋤去其短、務排物子而襲取其長。此乃為祭酒乎、非乎』。士厚曰、『此言也、狂夫尚沮』。而笑復如旧。余乃知言之中窾也」

(24) 近世に唐詩を好む朱子学者がいなかったわけではなく、木下順庵や新井白石は唐詩を好んだことで知られている(松下忠『江戸時代の詩風詩論―明・清の詩論とその摂取』(明治書院、一九六九年)、「木下順庵」、「新井白石」の項を参照)。しかし、鶴山と同時代の朱子学者である古賀精里、柴山栗山、尾藤二州の寛政三博士や頼春水は、孤山の如くに擬唐詩を多く作っているわけではない。したがって擬唐詩の創作は、朱子学者としての孤山の個性といってよい。

(25) たとえば朱熹は、「答劉子澄」(『晦庵先生朱文公文集』巻三五、七月二一日の書簡)に、「却是古楽府及杜子美詩、意思好、可取者多、令其喜諷詠、易入心、最為有益也(却って是れ古楽府及び杜子美の詩、意思好く、取るべきもの多く、其の諷詠を喜び、心に入り易からしめ、最も益有りと為すなり)」と述べ、古楽府とともに杜甫の詩は道理があって、取るべきものが多く、喜んで吟詠させ、内容が心に沁みやすくするように作られており、もっとも有益だと見なしている。

(26) 李孟璿、名は均、孟璿は字である。明の浙江海塩の人で、その文集『南荘集』が『千頃堂書目』巻十八に見える。なお、李孟璿の「題童居士雲深処作」は、明・李攀龍の『古今詩刪』巻二八に収められている。『古今詩刪』は寛保三年(一七四三)に和刻本が出版されているので、あるいは鶴山はこれを閲覧したかもしれない。

(27) 孤山には、「荘鶴二生字説」(『孤山先生遺稿』巻一〇)、「高子迪字説」(同前)があり、その内容から蓮池藩と佐賀藩から書生を受け入れていたことがわかる。鶴山にも「名山楼石上、送斎孟翼之南肥二首(名山楼の石上にて、斎孟翼の南肥に之くを送る二首」(『鶴山遺稿』巻三)があるが、詩題に見える斎孟翼とは斎藤西山(一七五四〜一八〇九)、蓮池藩儒のことである。

(28) 「海鷗文社」とは、肥前島原藩儒・川北温山(一七九三〜一八五三)の呼びかけにより、古賀穀堂を盟主として江戸で結成された漢詩文の結社である。この結社については、中村真一郎『頼山陽とその時代・下』(ちくま学芸文庫、二〇一七年、二三八〜二三九頁。初出は中央公論社、一九七一年)、生馬寛信『古賀穀堂』(佐賀偉人伝15、佐賀県立佐賀城本丸歴史館、二〇一五年、六一頁)、中尾友香梨、高橋研一、中尾健一郎編『鹿島文学―甦る地域の文化遺産―』(佐賀大学地域学歴史文化研究センター、二〇一八年)の「解題」一三〜一五頁を参照されたい。なお、海鷗文社の構成員については、眞壁仁『徳川後期の学問と政治―昌平坂学問所儒者と幕末外交変容―』(名古屋大学出版会、二〇〇七年)の「巻末資料二　文芸結社の同人たち」(六三三〜六三五頁)に出身国と併せて掲出されている。